

## 随 想

## 能登殿の矢の根

経営研究部 原 洋

医王寺を訪ねたのは葉桜の頃であった。

佐藤嗣信・忠信の墓は、寺の裏手の薬師堂の蔭にあった。剝落がひどく、碑面の文字はほとんど読めなかった。二人の忠節にあやかり、墓石を削りとして持帰るせいだという人もあるが、剝落は、むしろ砂岩風の石質によるものと思われる。傍らの母、乙和の墓は椿の大樹下にあり、嘆きをこめて蕾のまま散るといふ花は、事実うす桃色の蕾のまま一ぱい散りこぼれていた。

医王寺は、丁度花まつりであった。庫裏では、ささやかな宴が開かれている気配であったが、本堂には、粗末な花御堂の傍で折紙の花をくばる婦人が一人、坐っていた。それにしても、釈迦生誕の日に訪ね得たのは奇しき縁とも申すべきか。

医王寺の宝物殿は、宝物殿とは名ばかりの納戸で、板戸をおしあけて中に入ると、ガラスケースに陣太刀、弁慶の笈などが並んでいた。

## 笈も太刀も五月にかざれ帟幟(かみのぼり)

と、芭蕉の句にある太刀は、「奥の細道」には「義経の太刀」とあるが、それらしきものはみあたらなかった。中にも、目をみ張る思いをしたのは弁慶の筆蹟と、嗣信を射殺した矢の根である。医王寺の門前に立てられた「下馬」札の筆蹟は、弁慶のイメージにぴったりの、いかにも雄渾なものだが、同じく弁慶の筆と伝えられる紺地金泥の般若経は、細かく神経のゆきとどいた几帳面な筆蹟で、弁慶という人は案外武骨の人というより、相当の知識人ではなかったかと思直したりした。

赤く錆びた矢の根は、謡曲「八島」に、「判官(

ほうがん) お馬(んま)を汀(みぎわ)に打ち寄せ給へば、佐藤嗣信、能登殿の矢先にかかって、馬より下(しも)にどうと落つれば……」とある、平家のおん大将、能登守教経が放ったあの矢の根である。

義経が嗣信の戦死を悼んで、自分の直垂の袖とともに父元治に伝えた、とあるが、赤子の手ほどもある矢の根が嗣信の体につきささるには余程の近距離より射たものか。訪ねる人も少ない葉桜の寺のうす暗い納戸に、この矢の根をじっと見つめていると、遠い潮騒に交って源平の矢叫びが聞えてくるような幻想におそわれた。赤錆びてひっそりとガラスケースに納まっているに過ぎないのだが、合戦の修羅場を彷徨させる生々しさを秘めて横たわっていた。

「奥の細道」によれば、芭蕉が医王寺を訪ねたのは元禄二年の五月遡日とあり、「寺に入りて茶を乞へば、爰に義経の太刀、弁慶が笈をとどめて什物とす」とあり、折から端午の節とあって、あの「帟幟」の句が出来たわけである。

ところで先日、「曽良随行日記」を読んでもたら、芭蕉がこの地を訪ねたのは五月二日のこととあり、しかも寺には寄らず、笈も太刀も実際は見えていなかったようである。「寺によりて茶を乞へば」などと、芭蕉の創作も相当のものである。とすると、「或は、能登殿の矢の根も？」と、大分怪しくなってきた。

が、いたづらな詮索はやめよう。「事實は小説よりも奇なり。」という言葉がある。これは反面、「小説は事實よりも奇」なることを前提とした言葉であると思う。事實を見いだして、みじめな思いをすることだってしばしばあることは、何人も経験しているところである。事實を否定しようとは思わない。ただ事実と同等に、フィクションやイメージを大事にしてゆきたいと思うのである。